

TOP INTERVIEW

トップインタビュー

聞き手／矢吹光一

一般財団法人
とうほう地域総合研究所 理事長

Vol.
24



撮影：大橋史明

絵と言葉が創る世界

一画家・齋正機が語る福島への想いと創造の本質

福島市出身の日本画家

齋 正機 氏

1984年 福島県立福島東高校卒業
1992年 東京藝術大学 美術学部 絵画科 日本画専攻 卒業
1994年 同 大学院 修了

1. 出会いのきっかけ

— 故郷への回路を開く

【矢吹】本日はお忙しいところ、お時間をいただきましてありがとうございます。まず、先生と東邦銀行とのご縁についてお聞きできますか。

【齋】そうですね。北村前頭取が、たまたま新聞で、池袋西武での僕の個展開催の記事をご覧になったのが始まりです。銀行の方が、実際に会場へ足を運んでくださり、それが東邦銀行さんとのご縁につながりました。

【矢吹】その頃、先生は東京、関西ではファンがいられたようですが、福島県内ではあまり知られていなかったとお聞きしました。

【齋】近所の親戚からさえ、「画家をあきらめたのか」と言われるほどでした。東京では、それなりの知名度でしたが、福島で知っている人はかなり少なかったです。

2. 時代を共にしたカレンダー制作

— 続けることで生まれる価値

【矢吹】そんな中での出会いから、東邦銀行でのカレンダー絵画に採用されたのですね。

【齋】ありがたかったです。昔から“銀行さんの絵画のカレンダー”はとても魅力的に思っていたんです。作品が採用され始めたのは震災前ですが、2011年に東日本大震災を経て、“福島の風景を描くカレンダーの存在意義”がさらに大きくなっていきました。

【矢吹】長く東邦銀行カレンダー作品を描き続ける中で、どんな意味や変化を感じられましたか。

【齋】画家人生の中で、かなりの転機だったと思っています。それまでは福島での活動と県外の活動は別々に考えていました。しかし、長く東邦銀行さんのカレンダーとして福島の風景を取材、制作するうちに、“故郷との本当の繋がり”が生まれたのです。そして大震災がその絆をさらに深めました。15年以上も続けて描けたことも奇跡であり、僕にとって大きな誇りです。長年、名古屋の和菓子屋さん（株式会社両口屋是清）の美術顧問も務めていますが、和菓子の世界では「良いお菓子は、沢山売れるものではなく、長く売れること」という言葉があります。価値とは継続によって育まれるものなのです。東邦銀行さんは、それをまさに体現してくれました。毎年、福島県のあらゆる風景を描く機会を与えてくださいました。その積み重ねによって僕自身の故郷への理解も深まりました。画家としてこれ以上幸せなことではありませんし、「少しは故郷へ恩返しができたかな」とも思っています。

3. 原点の風景

— 福島市泉～岩代清水の風景から

【矢吹】先生のお話を聞いていると、非常に故郷の風景への思いが強いのですが、それはどこで、いつごろから培われたのですか。

【齋】やはり生まれ育った岩代清水ですね。今は住宅地ですが、生まれ育った頃は、湧水が豊かで、春には雪解け水が流れ、田んぼとリンゴ畑が広がっていました。子どもの頃、僕は体が弱くて、ガキ大将についていけない「みそっかす」でした。だから、ずっと風景を眺めていた時間が長かった。その“景

色を眺めていた時間”が、作品の原点になっている気がします。澄み切った空の青さ、透明感のある夕焼けの赤さ、そして、忘れられないのは、吾妻小富士に春の訪れとともに現れる雪ウサギ（ウサギの雪形）——そうした景色が身体の奥深くまで染み込んだのです。

【矢吹】福島出身詩人の長田弘さんは「人間は、自分が生まれたところの風景を基準にして、ものを見る」という言葉をエッセイの中で残されていますね。

【齋】まさにその通りなんです。今も全国いろんなところ取材していますが、どんな風景を見ても、心の中で故郷の盆地の雰囲気と比べてしまう。その感覚は、すべての制作のベースになっています。

【矢吹】そういった風景が忘れられないわけですね。

【齋】実際、本能的なのでしょうね。僕は要領が良い人間ではないんですが、幼い頃に吸収したことだけは忘れない特徴があるみたいです。人生全体を通じて土台になっているのでしょうね。

4. 画家への道

— 浪人時代の葛藤と決意

【矢吹】東京芸大の浪人時代のお話もお聞きできますか。

【齋】本当に親に迷惑をかけました。美大への進学は、親が大変心配して、何度も「やめてくれ」と言われて、経済的理由も手伝って、地元大学に進むよう懇願されました。そして、高校卒業後、美大受験を諦めるんです。でも、勉強もうまくいかず、くすぶっている自分自身も両親も疲弊していきました。大変苦しかった時期でした。

【矢吹】その後、どうされたのですか。

【齋】20歳で二浪目が失敗で終わり、父は定年退職を控えていた時期でした。「今からでもいい。好きなことをやれ。美大受験に戻れ」その言葉に、追い詰められた父の覚悟を感じました。経済的には、決して楽ではなかったはずですが。その覚悟に応えるには、自分も同じ覚悟を持たなければならないと思いました。

そして、東京の予備校に通って22歳で東京芸大に合格しました。その過程は、精神的にも、肉体的にも、金銭的にも大変でした。でも何とか踏ん張りました。

【矢吹】実際、受験時に奇跡が起こったとお聞きしましたが。

【齋】そうです。たまたまその年に限り、二次試験の一課題が急に石膏像デッサンから風景デッサンに変わりました。それは自分の得意領域で、“風景を眺めることが好き”が、そこで活きたのです。次の最終選抜試験では、生きている水彩画でチャボが出



題されました。チャボも、子どもの頃、農家の鶏小屋で何度も眺めていました。僕にとっては、風景もチャボも、僕が幼い頃から見続けてきた“福島の日常”だったのです。

【矢吹】 それまでの人生経験が、試験の時に活きたのですね。

【齋】 ようやくですよ。でも、親の「好きなことをやれ」と言ってくれた重い決断が、すべてを変えてくれました。それから44年が過ぎ、今があります。その後にも、何度も挫折を味わいます。でも、その度若い頃の経験で、多少、苦労があっても乗り越えて行ったような気がします。

5. 日本画家としての信念 — 現代美術からの転換

【矢吹】 大学卒業後は、予備校の講師をされながら、作品制作をされていたのですね。

【齋】 卒業後は、伝統的な日本画ではなく、新しい

日本画の創作を試みました。ただバブル期の終わりを迎え、美術市場が急速に冷え込んでいきました。それまでの活発な美術市場が一挙に流れが変わったのです。その時期は、先輩たちも、生活できずにどんどん画家を諦めていきました。そのことを目にして、将来に悲観した時もありましたが、結局、その時に考えたのは、世の中の雰囲気や流行にこだわらずに、「自分が本当に描きたいものは何か」ということでした。でも、その本質的に考えなくてはいけないことが、若い頃の自分にプレッシャーになっていくのです。

【矢吹】 そうですか。その悩みの時期をどう乗り越えていったのですか。

【齋】 そんな安易には、「自分が描きたいものは何か」が見つかりませんでした。32歳になって「こんなに苦しいなら画家をやめようか」と思い、喜多方に傷心旅行に出かけました。ところが、そこで発見したんです。今まで気に留めなかった土蔵の黄土色がものすごく美しく見えるんです。そして、赤いトタン屋根が風景の中でとても美しく見えるんです。その時初めて、自分が描きたかったのは、“目にしてきた思い入れのある風景、その美しさ” だということ。それは、幼い頃に福島で見た風景へとつながっていったのです。子供の頃に見ていたリンゴ畑、農家の風景、四季の移ろい。そういった“身近だった美しいもの” が、“自身にとって価値のあるものだ” と再認識した瞬間でした。

【矢吹】 そこからが、再びの出発だったのですね。

【齋】 そうです。そういう身近だった風景を、今まで勉強した絵画論と集約して完成度を高めました。その作品は、喜多方市美術館の『ふるさとの風景





展』で最優秀賞、銀座の老舗、日動画廊の「昭和会展」で、日本画で初めてグランプリをいただきました。それが大きな話題になって、美術コレクターたちの話題になりました。やっと「“幼い頃から故郷で感じた風景”を描くことが“自分の役割”だ」と思ったのです。そして“福島で感じてきたあの感覚”を、“普遍的な美しさ”まで昇華させる…。それがテーマになりました。

6. 作風に与えた福島原風景

【矢吹】どう作風に影響を与えているのか、具体的に教えていただけますか。

【齋】やはり最初に色ですね。特に春は色が柔らかいです。雪解けから新緑への季節、移ろいの中で“繊細な色のハーモニー”が生まれる。その感じた色合いの記憶を再現している感じなんです。その色合いが、作品に“心の柔らかいところへ届く力”を与えてくれたように思います。また、構図についても、福島盆地の地形が影響しています。周りを山に囲まれた盆地、自然に抱かれているような心地よさがあります。その感覚は、僕の画風では大切なんで

す。どこで学んだわけではなく、身体に染みついている感覚なんですけどね。

【矢吹】もう少し深く説明していただけますか。

【齋】例えば桜の絵を描く時ですかねえ。この土地の桜は、必ずと言っていいほど背景の山の色との調和があります。それは、盆地独特の景色なのです。そして農村風景を描く時も、福島の家屋が面白い。屋根の勾配、色、庭、福島らしさがふんだんにあります。そして描くこともすごく楽しい。なんといっても鑑賞者が「あ、子供の頃の風景だ」と直感的に感じているんです。福島は四季がはっきりしているので、春の芽吹き、夏の濃い緑、秋の色彩の豊かさ、冬の無垢な白さなど、子供の頃に感じていた色合いの記憶を加えて、風景作品を描くことが、自分の絵の特徴になっているんでしょうね。

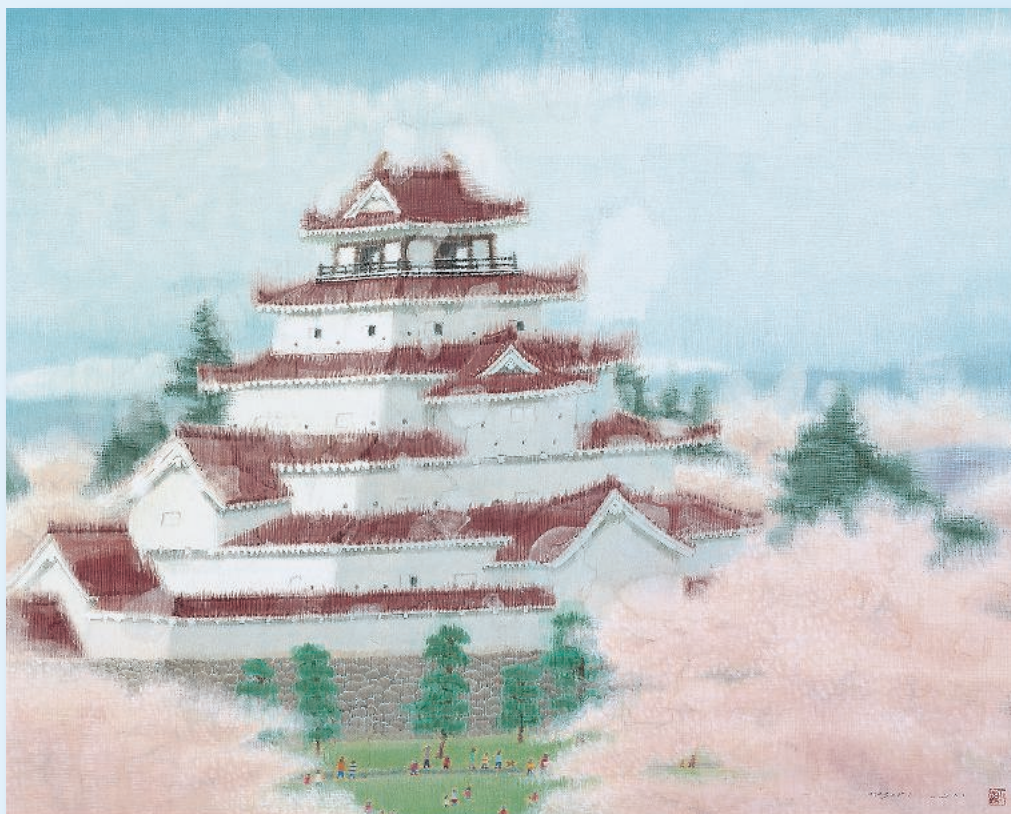
【矢吹】その記憶が作品の核になっているのですね。

【齋】その通りです。ふるさと離れて思う“記憶の福島”と、“今の福島”を自分の感性を通して調和させることが僕の特徴。そして、それが楽しいんです。

7. 震災と「鶴ヶ城」を描く使命 —「穏やかな午後ノ鶴ヶ城」

【矢吹】大震災の時のことを、少しお聞きしたいのですが。

【齋】当時、名古屋で生活していました。大震災時、名古屋も揺れましたが、津波、原発事故、水素爆発のテレビを見て、“人間の力の及ばなさ”をすごく感じました。『そしてもう一つ、大変なことになった福島に対して、自分は何ができる？』— 呆然の



「穏やかな午後ノ鶴ヶ城」2012年カレンダー 会津若松市 30F 日本画

中に、そんなことが浮かんでいたのです。

【矢吹】そして、東邦銀行から連絡があったのですね。

【齋】はい。「2ヶ月ぐらい経ってからでしたが、福島県の象徴である鶴ヶ城を描いてくれないか」という依頼でした。その時は、本当に涙が出ました。画家は無力だと思っていたのに、“福島の象徴として絵を描くこと”を求めてくださった。そして気づきました。僕に対して東邦銀行さんが自分を信頼してくださったこと。そして本気の福島への想いに涙が出たのです。

【矢吹】その絵には、特別な思いが込められているのですね。

【齋】そうです。鶴ヶ城はシンボルですが、“寄り添

う”という意味で、見上げる城ではなく、目線の高さを同じにしたお城を描きました。震災で苦しむ人たちと同じ目線で、一緒に前に進もうという思いを込めたのです。画家として経験を積んだことで生まれました。



震災後、福島はやはり変わりました。しかし、鶴ヶ城は不変でした。そして、鶴ヶ城の東邦銀行カレンダーを見た人が、「お城がこんなに優しい」と感じてもらいたかった。そういう思いを込めて描いたんです。

【矢吹】それが、先生の画家としての人生で、また重要なポイントになったんですね。

【齋】本当にそうです。東邦銀行さんのカレンダーが僕にとって特別な理由は、この仕事を通じて、画家としての人生を大きく輝かせてくれたからです。単なるビジネス関係ではなく、繋がり、信頼の継続、長年の関係が、大震災という大きな試練を経て、とても重要な意味を持つようになりました。

8. 帰還困難区域での取材 —「夜ノ森ノ桜」

【矢吹】最近の活動の中で、帰還困難区域を訪問されたとお聞きしました。

【齋】はい。2021年の桜の時期に、富岡町に1週間ほど滞在させていただきました。その時、知人の若い動画作家とカメラマンも同行してもらいました。

【矢吹】なぜ、複数人で取材されたのですか。

【齋】自分一人の目だけでは、大切な何かを見落とすかもしれないと思ったからです。それに、スケッチだけでなく、取材の様子そ

のものを、動画と写真で記録に残したかった。そして、その取材を通して、“本当に大切なこと”に気づかされました。夜の森では、桜が満開になるこの時期だけ、震災前に帰還困難区域に暮らしていた人たちが集まるんです。

【矢吹】その光景をどう感じられましたか。

【齋】一言で言えませんが、「人間って、毎日幸せで

夜の森の桜

夜の森の桜のトンネルの中で花びらが舞う
みな夢中になり花びらを追いかける
気持ちが花びらを追いかける
そんな嬉しい気持ちは
一年に何回しかない
でも大切な
その何回かのために
人は懸命に生きているのだ
たまに嫌なことがあろうとながろうと
たまにある良いことのために生きているのだ

「夜の森の桜」の詩
2022



『夜ノ森春風物語』15F 東邦銀行2022年カレンダー



『福島市物語～桃ノ花咲ク頃～』120号 日本画
福島市市民センター1階に展示

いられるわけじゃない。だからこそ、その一瞬のために、人は生きている」と思ったんです。その思いから、「夜の森の桜」という詩が生まれました。この詩は「一瞬の喜びこそが、人生全体を支えている」ということです。振り返ってみると、それは子供の頃から自分の感覚の中でも生きていました。吾妻小富士の雪ウサギを見た喜び、春の芽吹きを感じた時の感動、そうした何気ない一瞬一瞬こそが、自分の心を支え、絵を描く原動力になっていたのです。だからこそ、画家としてできることは、その“普遍的な一瞬の美しさ”を絵として残すことです。『福島市の桜を描き、四季を描く。その絵が、見る人の心に小さな希望の灯をともしることができたなら…』と思っています。

【矢吹】それは、福島全体へのまなざしにも繋がりますね。

【齋】そうです。福島は大震災の影響を始め、人口減少など、いろいろな課題もあります。でも、その一方で、この土地には本当に素晴らしいものが数え切れないほどあります。大切なのは、それを“見つけようとする心”です。ここで暮らす人たちが身近な魅力を発見すれば、県外の人たちも、“福島情景の大切さ”に気づく。そしてそれが未来につながっていくのだと思います。

9. 福島の魅力

—「桃源郷」としての再認識

【矢吹】あらためて先生が考える福島の魅力とは何ですか。

【齋】桃源郷だということです。でも、それを実感するかどうかは、自分たちの感性と眼差しにかかっています。童話の「青い鳥」のように、遠く海外を

旅しても最後には目の前の庭が桃源郷だったと知るので。福島がそうなのだと思います。

【矢吹】 具体的には、どういうことですか。

【齋】 この土地は、治安も良く、豊かな自然に恵まれ、四季の移ろいも素晴らしい。そんな何気ない日常が、世界に目を向けると、実はとても貴重な価値を持っています。外国の方が日本に訪れて感動するのは、豪華な建物や派手な観光地だけではありません。穏やかな暮らし、街の清潔さ、そして身近な自然の美しさに心を動かされているのです。田んぼや山々、農村の風景も、まさに世界に誇れる財産です。しかし、そこに暮らしていると、それが当たり前になり、価値を見失ってしまいます。だからこそ、僕は絵を通してその魅力をもう一度伝えたいと思っています。そして故郷の魅力を実感することで誇りが生まれる。その誇りこそが“福島の未来”を作っていくのだと思います。

【矢吹】 それは、経済的な視点からも重要ですね。

【齋】 そうですね。これから観光客も増えるでしょう。若い人たちも、故郷に帰ってきたいと思うようになるでしょう。大事なのは、そこに住む人たちが、毎日の風景の中に幸福を見つけることです。その心に染みる、そしてあふれる豊かさは、実は福島の最大の魅力なのです。

10. 若い世代への期待と画家としての信念

【矢吹】 若い世代への期待についてお聞かせください。

【齋】 東京の上野では古民家をカフェやバーに改装する若い人たちが増えています。収入は少ないかも

しれないが、「心穏やかになる空間を作りたい」という思いで動いている。これは、昭和から平成を経て、令和の人々が癒しを求めているからです。その動きは強い流行だと思います。

【矢吹】 それは、経済的合理性を超えた、感性の目覚めですね。

【齋】 社会的な戦略や戦術から離れられないと、直感や感性は育たない。人間が本当に求めているのは、心が動かされるもの。つまり、花のつぼみが咲く瞬間の美しさ、季節の移ろい、自然が与えてくれるものです。でも、現代は競争や効率を最重要視してしまう。画家として、講師として、若い世代に伝えたいのは、「観るチカラ、感じるチカラ」なんです。観ようとする心、感じる心、それらが育つと、福島の風景がどんなに素晴らしいか、自分たちの故郷がどんなに貴重なのか、自然と理解できます。

【矢吹】 画家として、最も大切にしていることは何ですか？

【齋】 やはり、繰り返しになりますが、“作品で心の柔らかいところに届く風景”を描くことですね。福島で感じる感動や感覚は、世界中の人が共有できるものです。例を挙げれば、春の新緑を描く時、自分が感じるのは生命の輝き、冬の寒さに耐えて芽吹く生命循環のドラマです。それらを深く感じられる福島を通じて、その普遍性を作品で表出することが、自分の仕事だと思っています。

【矢吹】 つまり、福島での眼差しを描くことで、人類共通の感情に訴えかけるといことですね。

【齋】 その通りです。その点で、自分は日本画という古風な技法を選んでよかったと思っています。日

本画は、細部を丁寧に観察しながら、作品の中で調和を考えます。その特性は日本人の心を特に震わせるみたいです。作品制作は沢山の時間がかかりますが…。一枚の作品を完成させるのに、数週間、数ヶ月かかることもあります。でも見方を変えれば、それだけ福島の風景と対話しながら描くのです。作品との対峙で苦労した分だけ、鑑賞者に伝わると信じています。

11. 次世代へのメッセージ

【矢吹】最後に、若い世代へのメッセージをいただけますか？

【齋】時々、デジタルから離れてほしい、花の匂いを感じたり、風景をゆっくり眺めたりすることをしてほしい。そして福島の風景を見つけていかないと。季節ごとに、自分たちの周りの風景がどう変わるのかを楽しむ。そういう原始的行為が、人生を豊かにするのです。



最近デザインした両口屋是清（和菓子製造メーカー、名古屋市の老舗和菓子屋として知られている）のパッケージ

【矢吹】見ようとする力ですね。

【齋】そうです。福島の風景の中に、元気や希望のヒントをもらえるかもしれません。また、その力が足りないと、社会やデジタル上の不安ばかりを受け取ってしまう。だから、子供たちは、自分たちの周りの情景を楽しむことが大切なんです。そして、できれば親御さんにも一緒にしてほしい。子どもに「勉強しなさい」と言う前に、一緒に朝日を見に行く。一緒に田んぼを歩く。そういう親子の時間が素敵な感性を育むのですから。

【矢吹】それは、狭義の教育とは違う、もっと根本的なものですね。

【齋】そうです。教育は知識が大事ですが、“感性を磨くこと”とは少し違う。“感性を磨くこと”は、人生を通じた営みです。感性を磨くものが福島にはどれほど豊富にあるか、知ってほしいですね。そして同時に、福島の外に出てみることも大切です。僕も東京や関西で活動する中で、改めて“福島の価値”をいつも実感します。今は、故郷を描くことが、

自分にとって最大の幸福です。若い世代の皆さんにも、まず福島をよく観てほしい。そして、その風景を愛する心が、自然と育ち、“福島の未来”を作っていくしてほしいです。

【矢吹】本日は、非常に貴重なお話をいただきました。ありがとうございました。

【齋】こちらこそ、ありがとうございました。こういう機会をくださって本当に感謝しています。

インタビューを終えて

齋正機氏の描く世界にひとたび触れると、私たちは誰もが、胸の奥にある「大切な場所」へと連れて行かれるような、不思議な郷土愛に満たされる。

今回のインタビューは、福島市出身の日本画家である齋正機氏である。その優しくも力強い表現力の原点には、「家族の記憶」と「福島という風土」が、深く結びついていることを強く実感させられる。齋氏は、その原風景として、福島市の岩代清水の豊富な湧き水とりんご畑、田んぼそして吾妻小富士を挙げられた。実家のあたたかな日差しに包まれて、縁側で過ごす時間が何よりも好きだったとおっしゃっていたのが印象的だった。



『塩屋埼灯台ト共ニ』15F 東邦銀行2019年カレンダー

齋氏の作品を語る上で欠かせないのが、ノスタルジックな鉄道の風景である。その風景の主役は、かつて機関士として実直に職務を全うされたお父様の後ろ姿だ。鉄道の響き、そして厳格ながらも家族を支え続けたお父様の生き様。それらは幼き日の齋氏の五感に深く刻み込まれ、時を経た今もなお、作品に唯一無二の生命力を与えられているのではないだろうか。私の義父もかつて機関士であったが、「ぼっぼや」としての志と誇りは亡くなるまで繋がり続けていた。

また、日々の暮らしの中で子供たちの成長を静かに見守り、無償の愛を注ぎ続けられたお母様の存在も、齋氏の色彩の温かみや、他者に向ける優しい眼差しの根底に息づいているに違いない。自分を育ててくれた家族への深い感謝と敬意が、そのままキャンバスを包み込む慈愛の

空気感へと昇華されているのであろう。

こうした家族の物語が背景にあるからこそ、齋氏が毎年描き続けてくださっている東邦銀行のカレンダーは、単なる季節の案内役を超え、私たちの心に深く染み入る。福島の四季は、齋氏が家族と共に過ごし、見つめてきたかけがえのない故郷そのものなのではないだろうか。

東日本大震災以降、当地福島は激しい変化の波にさらされてきた。失われた風景もあれば、新しく生まれ変わる街もある。そのうつろいの中で、齋氏は「変わってゆくもの」への愛おしさと、「決して変えてはならないもの」への祈りを込めて筆を握り続けておられる。齋氏にとって福島を描くことは、自己のルーツの確認であり、同時に、この土地で生きる人々、そして次の世代への最大のエールなのだと感じる。アートという言葉借りた、極めて純度の高い「故郷への恩返し」の姿を、そこに見る思いがする。

東邦銀行本店の受付フロアーに「ふくしま物語～桃源郷59の願い～」という作品が飾られている。これは、東日本大震災からの復興と平穏への願いを込め、福島県内59市町村の形を桜に見立てて描かれた幅6メートルの超大作である。

是非、皆様も機会があればご覧になっていただきたい。

今回のインタビューを通じて、地域のシンクタンクとして福島の未来を模索する私たちにとっても、進むべき道を照らす大きな光が見えた。地域のアイデンティティとは、突き詰めればこうした個人の尊い記憶や人々の絆の集積に他ならない。齋氏の福島への並々ならぬ想い、そしてご家族への愛情に深く敬意を表するとともに、その筆が紡ぎ出す福島の物語が、これからも多くの人々の心を照らし続けることを確信している。

齋先生、これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。

(インタビュー 矢吹 光一)



矢吹理事長

齋様